その1　町家から学ぶ

木林学のススメ

中川 典子

「木林学」ことはじめ」を京都新聞市民版に掲載して以来、四年ぶりです。今回は、素材である「木」だけでなく、木造建築、意匠、森林などへ視野を広げて、読者の皆さんとともに学んでいきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

私のような木を商う者にとって、町家は、伝統的工法を見直すとともに、適材適所という言葉の通り、木材の特徴をいかした日本建築の奥深さを思い知らされる存在。たとえば、写真にある、一九二三（大正十二）年築の京都市東山区の町家を見てみましょう。

醤油屋を営んでいた伊藤喜商店は、この界わいの代表的な老舗でした。戦前に、店主がヨーロッパ旅行に出かけるなど「大店」として知られていました。たたずまいは、一階と二階が同じくらいの高さに作られた「総二階」と呼ばれる形式です。このほど、外観などほとんど昔のままで、料理店に改装されました。

職住一体の町家は、必ず「店の間」があり、「通り庭」という表と裏をつなぐ土間があります。通り庭の、おくどさんがある部分を「走り庭」、おくどさんの煙や火の粉が上がっても大丈夫といわんばかりの吹き抜けの空間を「火袋」と言います。火袋は木組みがおもしろく、強度とねばりのある松の梁が空間を横ぎり、家の中心である六寸五分の檜の大黒柱が、天に吸い込まれるように、存在を主張しています。柱は、山にある木々と同じように天に向かって据えるのが、基本中の基本。京の町家は、ご禁制の影響もあり、ほとんどが格普請なのですが、この大店は、ほとんど檜普請でした。

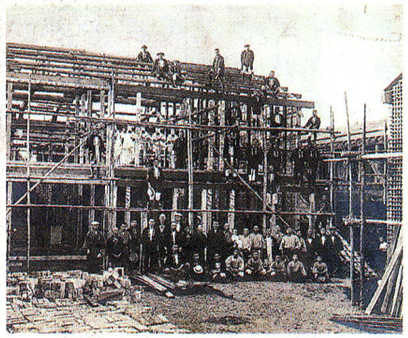
床の間の意匠は、主人または大工の見せどころ。松の床板は奥行き約三尺（九十㌢）あり、今では得ることのできない材。床柱に松皮付丸太、落掛に赤杉、床框に黒檀、脇床の床板に欅。そして紋竹、北山杉、鉄刀木などさまざまな材種を使っているのに、すっきりとした室礼に、時を忘れるような安らぎを感じます。

この界わいは、千年前から六道参りの参拝道として栄えました。隣家の榊原神具店では、神具にかかせない木曽檜の天井があり、向かいの足立顔料店では、弁柄の朱色が鮮やかに。町家それぞれの個性を表現しつつ、京の町並みを形成しているのです。

なかがわ・のりこさん　一九七〇年京都市生まれ。茶道美術出版社を経て、現在、実家の酢屋・千本銘木商会で、木材の販売、木の内装づくりや提案に携わる。酢屋は屋号。幕末には坂本龍馬が滞在したことで知られる。

「適材適所」の奥深さ

左は約四間（7㍍50㌢）の長さの松の梁がある火袋（京都市東山区松原通大和大路二丁目「貴匠桜」）。右上から格子が美しい外観を維持して改装された新しい店と、1922（大正11）年の上棟式の様子（伊藤喜商店提供）



欅の看板には玉杢模様が見え、荘厳な風格を感じる

典子さんのポイント

看板　力強い杢目、末永い繁盛願う

大店の印である看板は、背丈ほどあるものが二、三枚。欅の玉杢であつらえてあり、その筆遣いの勢いが当時の旺盛を語るようです。なぜ、欅が選ばれるのかは、諸説あります。

木の中でも欅は高級銘木、いわば木の王様。それをあつらえてこそ一流である、頂点を極める意味で使われているという説。堅木で、反りにくく、その雄大な杢目が永久を表し、雨にも風にも耐える強じんな木質が好まれているという説などあります。実際に欅はずっしりと重みもあり、大きな看板を掲げるには、それなりの大きな店先が必要です。

今回、古い建物を改装してオープンした新しい店は、栃の看板を作りました。できたての看板は純白で杢目はなかなか見えません。しかし、年月とともに木肌は濃くなり、杢目が浮き立ってくるのです。数年後には独特の縞模様である縮杢が表れるでしょう。店が長く繁盛することを願うとともに、その看板を下ろさなくても良いように、はじめから大きな目立つ看板をするのだともいわれています。

昨今、はじめから古色塗りをする看板もありますが、素材の良さを生かし、その意味を理解しながら建築や意匠があるのだということを、この看板にあらためて教わりました。

メモ　伊藤喜商店跡は、現在料理店の「貴匠桜（きしょうさくら）」。京都市東山区松原通大和大路二丁目轆轤町。☎075(561)3339。水曜休。

毎月第1週に掲載します。